

屋上の金魚

放置は危険

寝台には、枕のところに大きい飾鏡がついていた。

今日もこの銀幕に映る虚像を覗く。

獅子頭の金魚が泳いでいる。

——いつからだろう。

——これが見えるようになったのは。

私の寝台の鏡は幻の銀幕。屋上庭園の水槽を映し出す。

父が屋上に並べた六つの大きな水槽。

金魚が滑るように泳ぐ。金魚の動きに合わせて水面が月が揺れる。私は、綺麗な円形を描く波紋が好きだった。どうしてこんなに綺麗な円を描くのか…。

それは舶来品の寝台で、この家で所有することを許された数少ないものの一つであった。

中国風の仕様で、側面に鳥や花があしらってある。小柄な私一人で寝るには十分すぎるほど大きく、私にあてがわれた西洋風の寝室ではそこが寝室であるにもかかわらず、その寝台が大層異質なものに思えた。此処にあってはいけないもの。そんな気がした。また余程古いものなのか僅かに身動きをとるだけでもギィギィと嫌な音を立てた。

だから私は一日の殆どの時間を寝台の上で決して身動きをしないで密密と過ごす。白い枕に顔を埋めて、鏡を眺めて過ごす。やはりこの家で異質な存在であった私は、この異質な空間で止まったように生きるのだ。

私は私が嫌いだった。

昼間、北向きの薄暗い部屋の中で覗き込む鏡には私の姿が映った。薄暗い部屋の中、影になった女の顔は明瞭にはわからなかったが、艶々とした黒髪だけがあたかもそれ単体で光を発するかのように輝いてみえた。

私は、ここで老けていく。

鏡をのぞきこむ女の顔を眺めながら、ただぼんやりとそんなことを思った。日の光を浴びず、運動もしない軀は青白く貧相なものに見えた。袖から伸びる腕も細く白く、まるでアルビノのようだ。そこには少女らしい肩の丸みも無ければ、女らしい艶やかな二の腕も無く、どこまでも病的で中性的な腕があった。脚も活発に駆けまわる女学生のそれとはかけ離れていた。自分の体重を支えるだけでたくさん、それすらもままならないような脚であった。

それでも、家に来る男たちは、この腕を、この脚を、私自身を、美しいと呼ぶのだった。脚に舌を這わせながら、うわごとのように何度も何度も美しいと繰り返す。私はそれをただ無感動に、何処か自分とは関係のないことのように聞いている。

男に抱かれているときは、私は私ではなかった。私はいつも、男に抱かれている白く病的で無表情な自分を寝台の上のほうから、ちょうど天井の梁の辺りから眺めているのである。そして最後にあのギィギィという嫌な音だけが残る。

昔、父がビードロを買ってきてくれたことがある。七色に塗られた綺麗なものだった。透き通るような薄く、張り詰めた硝子。指で触っただけで壊れてしまいそうで、そんな危ういものにどうやって色を浮かび上がらせているものかと幼心に不思議に思った。

私はそれを宝物のように大事にして、部屋の棚の上に飾った。窓から差す光がビードロにあたって床に七色の影をつくる。

色の寡ない少女時代で、そのビードロの色は異様に鮮やかに思い出せる。

——いや、実際には思い出せない。

私は、ある日、恐る恐る吹いてみたのだ。

触ったら壊れてしまいそうで、大切に飾っておいたのに。

私は吹き口に口をつけて、少し強く息を吹き込んだ。軽くガラスの底が膨らんで、ぽびん...という何処か間の抜けた音がした。私の信仰は壊れた。

——嗚呼、くだらない。

——この女は、こんなに儂くてとても幻想的で蠱惑的で触れることすら躊躇われるよ
うなこの女は、

——触れてしまえばただのつまらない女で、

私はビードロの底を持ち、手で握りつぶした。ガラスの破片が突き刺さり、手から血が流れる。痛い。くだらない。床に散らばったガラスの破片は色が混ざり合って、キラキラと光を称えていた。

そこまで思い出して、軽く眩暈がした。

気がつけば、汗で服がべったりとしている。動悸も早い。

——少し、落ち着こう。

嫌な記憶だった。

思い出は、勝手に再生される。

嫌な思い出は勝手に創られて、勝手に私を蝕む。

私は、ビードロのことは忘れた。壊れた玩具のことをいちいち覚えてられるほど、確りと生きてはいなかった。

私は、ビードロについては何も覚えていないことになる。忘れたことを覚えているなんておかしいのだ。そんなことが鮮やかに思い出せるのはおかしい。

知らないうちに勝手につくった記憶だ。

——私は、くだらない女。

そんな自責の念が作り上げた妄想なのだ。

少女時代には、殆ど思い出なんかない。思い出があってもおぼろげでいつも紫色の靄に包まれているようだ。

——見えるようになったのはあの頃からかもしれない。

私の病んだ心がビードロについての記憶を捏造したころのような気がする。いや、違うのだろうか。わからない。

私はある日、それに気がついた。いつものように鏡を覗くと、私の顔の向こうに獅子頭の金魚が四十五と映る。月も映れば星も映る。水面が映っている。私は、それを当然のように考えた。だから、いつからこれが見えるようになったのか思い出せない。

その時の私の気持ちは、判るような気がするし判らないような気もする。どちらにせよ、過去の事はいつも明瞭ではない。

気分が悪い。何故思考というものは自分の意志と無関係に展開されるのか。

私は、金魚を世話し始めて、自分の目の色の綺麗な事に気がついた。色素の少ないそれは翡翠のようで、光は無いが透き通っている。あの眼に似ていた。

——あの眼？

何だそれは。くらくらする。

吐きそうだ。

今日は何かがおかしい。思考に霧がかかったようだ。時系列がはつきりしない。

何処までがイマで、何処からが過去なのか...

そもそも、霧がかかっているのはいつもじゃないか？

イマじゃないことはいつも霧がかかったように曖昧で...

呼ぶ声が聞こえた気がする。

何処からの声か。

過去か？イマか？

私は自分の名前を呼ばれたことなど暫くない。だからこれは、妄想だ。

母は、父は...

私は、初めて自分の中で好きな部品を見つけた...

この家は壊れている...

虚ろな目を宙に彷徨わせる、母だった女。病に倒れ瀕死の状態の父。そして死んだように生きる私。唯一この家で生きているのは家政婦くらいだ。午前中に来て無言で父の世話や炊事をして、帰っていく。

この家では全てが異質だ。私たち家族は、おそらく何処に行っても異質だ。此処にあってはいけないもの。そんな気がした。また余程古いものなのか僅かに身動きをとるだけでもギィギィと嫌な音を立てた。

だから私は一日の殆どの時間を寝台の上で決して身動きをしないで密密と過ごす。白い枕に顔を埋めて、鏡を眺めて過ごす。やはりこの家で異質な存在であった私は、この異質な空間で止まったように生きるのだ。

いや、

何かが変だ。

思考に霧がかかる。

寝台の話か？瞳の話か？家族の話だったろうか？

如何でもいい。

それより...

さっきからなんだ？

チクチクと違和感...。背後だ。ドアの向こう。廊下。

誰かがいる？あり得ない。今は夜だ。この家は、死んでいる。

不安だ。汗が止まらない。何がそんなに不安なのか。

呼吸が荒くなる。

首の辺りにチクリと

妄想だ。

私はもうとっくに狂っている。

見えないものが見える時点で狂っている。

だから、気の病だ。

振り向けない。

ドアは閉まっているはずだ。でも、怖い。

振り向けない。

もやもやと。霧がかかる。

どれほど時間が経っただろうか。

気のせいだったのか？

いつの頃からだろうか。子供の頃からかもしれない。もしかすると、生まれた頃からのか？

何か漠とした不安を抱えていた。いつでも何かに責められているようで、心が休まることはなかった。

実際、非難や軽蔑の視線を周囲から向けられたのだと思う。私は自分の境遇を理解していたから、そんな風に見られるのも当然だと思っていた気がする。

そうじゃない、不安なのだ。

誰かの言葉や視線じゃない。そんなものではなく、ただ漠とした黒い塊なのだ。理屈でもなくただただ不安なのだ。

寒い。不安で不安で仕方がない。

背後でゆっくりとドアの開く気配。

私はゆるゆると振り返る。

暗い部屋の向こう

月明りに照らされた黒いドア

その隙間から

視ていた——。

隙間から——

私のことを視ていた——。

あれは私の眼だ。

2

昔の話だ。

といっても、鏡が水槽を映すようになってからの話だ。

熱が出た。いつもより意識が朦朧としていて、気を付けていないと拡散してしまうような、そんな不安定さと心地よさ。うつ伏せた身体から寝台に熱が逃げていく。吸い取られて、吸い取られただけ気分が楽になって、またユルリと溶けてしまいそうになる。もう、このまま溶けていきたい。

鏡に、金魚の背が映った。たくさん。水面が陰って、鏡が真っ黒になるくらいの量の金魚金魚金魚。

吐き気。朦朧とした私は身体と精神が乖離していて、自分の体は目の前の光景に正直に反応して今にも洗面台に駆け出そうとしているのに、目を離すことも出来ずにただただそのまま静止していた。心はむしろ穏やかで、波一つない水面のように澄んで澄んで透き通っていた。僅かな絶望感と解放感、身体を駆け巡る吐き気とオーガズム。

ふらふらと部屋を出て、父の居る——あのとき父は家に居たらしい——部屋へと向かう。ぼそぼそとした声で、金魚のことを伝える。どんな言葉で父にそれを伝えたのかはよく覚えていない。口の中がカラカラで、唾液がベタベタと気持ち悪かったのは覚えている。

父は、二瞬ほど反応が遅れて、それから私を一度殴って、急いで屋上へと向かっていった。私は無感動に五秒ほど俯いて、頬と首の痛みが身体から精神へと漸く伝わったのを確認してからのろのろとした動作で階段へと向かった。一段一段を数えながら重い体を引きずって登る。全部で三十六段。ドアを開けた解放感。

それは屋上庭園に配置された六つの水槽の内、階段から一番離れた右端の水槽だった。

父は、その前に佇んでいた。

——ちゃんと世話をしておけ

私にそれだけを言って、水槽の中をずっと覗き込んでいた。

腹を向けて浮いた沢山の金魚が、その表面に均整に並んだ鱗が、死んだ魚特有の匂いが、風の無い夏の空気が、綺麗な波も立たない水面が、私の前で水槽をジッと見つめる男の背中が、死にきったこの家が、腐っていく私が、気持ち悪かった。

もしかしたら…

鏡が像を結ぶようになるのは、この後の話かも、しれない。

目を覚ます。

やはり寝台の上にいる。寝てしまっていたみたいだ。

私はまだまどろみ半分夢を彷徨ったまま、父の事を考えていた。

父の金魚は、唯一の自慢の品だった。彼の金魚は数々のコンクールで入賞した。仕事でいろいろな国を飛び回っていて、たまに家に帰ってくると水槽に付きっきりで...

猩々、素赤、更紗、キャリコ、丹頂、背赤、両奴、六輪...。金魚は生まれた時は醜い真っ黒で、そこから色が抜けていく。父のお気に入りには江戸地金。透き通った身体に、黒のまだら模様、孔雀型に広がった尾。突然変異種をさらに配合した、壊れやすい、父の大切な玩具だ。

私は、江戸地金が嫌いだ。私によく似ている。そして全く似ていない。

軽い眩暈。

私の部屋のドアがスウツと音を立てずに開いた。

覚醒。私の意識がキュウツ、とピアノ線のように針のように細く細くなっていく。自然と息が詰まる。

母が徘徊を始めた。父の病状が悪化してからだ。

でも、この家で変わったことといったら、お手伝いさんが家に居る時間が増えたくらいで、私の生活には何の変わりも無く、相変わらず寝台の上で死んだように寝て起きてを繰り返す。もしくは、もう死んだ者なのかもしれない。異質な家、その家の中でも異質な寝台、異質な家族、その家族の中でも異質な私。死んだ者ばかりがこの家に住んでいるのだとしたら、とうに私は腐って溶けてしまっているに違いない。

首筋に、ちくちくと視線を感じる。私が鏡の中で見つけた、あの眼だ。

私が好きな、あの眼だ。

視線はさわさわとうつ伏せになった私の首筋を撫でる。私はドアに背を向けたまま寝台の上で静止する。鏡には多分、優雅に泳ぎまわる金魚と、頬の落ち窪んだ母の顔、そして私の瞳と母の瞳、金魚が水面につくる波紋、ベツタリとした初夏の空気とひんやり湿気たかび臭い部屋の腐臭、それら全てが映っている。見たくない。あの女も、金魚も。

暫くの静止、沈黙。多分、私が鏡を覗けば、母はすぐに消えてしまうだろう。ほんの一瞬目を合わせることが出来れば、時間は流れだし、私はまたすぐに意識の海に溶けだすことが出来る。ジリジリと視線が首筋を焼いていく。とてもとても狭い所に入れられてしまったような、刃物も先端を突き付けられたときのような、息の仕方を忘れてしまったときのような...

ふっ、と張り詰めた空気が緩む。凝集された空気がまたただの無意識の一部に戻っていく。
階段を降りる音。
母は行ってしまった。

ドアを閉めようと寝台から立ち上がる。脳から血が下がり、立ちくらむ。空から落ちる夢を見たときの、もしくは人の顔が無数に展示された一本道の廊下を延々と何かから逃げ続けている夢から覚めたときの、陶酔。吐き気。もう一度座り、呼吸を落ちつける。

もうそろそろ、この家は臨界点を超える。

思考が現実から離れたものになって、私はより私ではない何者かになっていく。金魚が見え始めたのはいつで、母が私の部屋を覗くようになったのはいつなのか、思い出せない。ハッキリとしない。壊れた玩具のことをいちいち覚えてられるほど、確りと生きてはいなかった。
——どこから始まって、どこで終るのか。

終わりは近い。すぐに来る。

父の病状が悪化した。

もしかしたら、金魚が死んだ夏の日は、まだやってきてないのかもしれない。

3

今朝、父が息を引き取った。

私には家の空気が紫色に見えていた。ジメジメした夏の匂いだ。

父が死んだことで、家の中の空気が少しシンとした。私は父の枕もとで、ジッとその顔を見つめていた。

とりあえず、家の奥からガーゼをひっぱり出してきて、父の顔にかけた。

あとのことは何もできないし、する気もない。

部屋に戻った私は、寝台の上につ伏せになった。私と紫の空気との間に、透明な靄が出来る。落ちるように眠った。

鏡が月を映している。

気が付けばもう夜になっていた。雲一つない空に浮かんだ月が、鏡を通して部屋を、寝台に横たわる私を、照らしていた。

真っ白い光を浴びた顔はより白く、

—— これは父の顔だ、

—— そして私を見ているこの目は母の眼だ、

私は屋上に向かった。

母が、月明りを背に立っていた。

振り向いた母の口から、ヌルリ とはみ出したもの。

あれは、金魚だ。

—— ああ、この人も女なのだ、

そう思った。

また、乖離していく。

心はむしろ穏やかで、波一つない水面のように澄んで澄んで透き通っていた。

僅かな絶望感と解放感、

身体を駆け巡る吐き気とオーガズム。

安心、
哀惜、
郷愁、
立ちくらみ、
夏の日、
紫の霧、
金魚、
金魚、
金魚。

私は足元に落ちていたレンガを拾い上げる。水槽の周りを装飾しようと、父が買ってきて放置したものだ。

母の頭に、正面から振り下ろした。
噛み切られた金魚の尾がポトリと落ちる。

水槽の水が血で濁っていく。
手に痺れが残った。

私はもう、ここには帰らない。